

テンパス



TEMPUS

2024年(令和6年) **84**号



蕎原(そぶら)とちのき谷の入り口付近に立つ道標(みちしるべ/どうひょう)

も く じ

「蕎原(そぶら)とちのき谷」が日本遺産に追加認定されました
岩橋善兵衛(いわはしぜんべえ)と大坂の天文学者たち
新緑のブナ林自然観察会を実施しました

／ 貝塚市文化財保存活用地域計画策定事業

パブリックコメントと市民説明会を実施しました

古文書講座—市内にのこる身近な古文書—

「岸和田藩の年貢のしくみ」

文化財講座・セミナー・展示

／ 善兵衛が観た未来プロジェクト～家族で楽しむ測量・地図・宇宙～
市内3か所で伊能大図を展示します！

「蕎原（そぶら）とちのき谷」が日本遺産に追加認定されました

令和6（2024）年6月に、本市蕎原にある「蕎原とちのき谷」が、日本遺産『葛城修験（かつらぎしゅげん）』一里人（さとびと）とともに守り伝える修験道（しゅげんどう）はじまりの地」（以下、「日本遺産葛城修験」とします）の構成文化財として追加認定されました【写真1】。本市で初めての日本遺産です。このことは、広報かいつか9月号で市民の皆様にお知らせしましたが、本紙で詳しく紹介いたします。

【日本遺産と葛城修験】

日本遺産は、地域に点在する文化財を「ストーリー」で結びつけて、広く発信することにより、地域の活性化を図ろうという取り組みです。平成27（2015）年から始まりました。魅力的なストーリーを文化庁が日本遺産として認定することになっており、全国で104件の日本遺産が認定されています。日本遺産葛城修験もそのひとつです。

修験道とは、山に入って厳しい修行をおこなう宗教であり、「葛城」と呼ばれる和泉山脈・金剛山地一帯は、修験の開祖とされる役行者（えんのぎょうじゃ）が、最初に修行を積んだ「修験道はじまりの地」とされています。また葛城修験の特徴と言えるのが、里人（近隣集落の人々）との関わりでした。葛城修験は、行者（ぎょうじゃ／修験道の修行をする人）だけでなく、里人が行場（ぎょうば）を守り、行者の修行を支えることによって成り立っていたのです。

葛城修験については、和歌山県、大阪府、奈良県の19市町村が日本遺産認定に取り組み、令和2（2020）年に実現していましたが、これまで本市、泉南市、熊取町には葛城修験に関係することを証明できる文化財がなかったため、これに加わることはできませんでした。しかしこのたび、本市は蕎原とちのき谷、泉南市は金熊寺（きんゆうじ）と信達（しんだち）神社、熊取町は降井家（ふるいけ）住宅が葛城修験に関わる文化財であることが判明したことから、追加認定を受けることができました。

【蕎原とちのき谷について】

蕎原とちのき谷は、和泉葛城山中にある谷のひとつであり、「不動谷」とも呼ばれています。蕎原のバス停から和泉葛城山に向かって道を800mほど進み、キャンプ場である「そぶらフォレストガーデン南」を過ぎたところにあります。谷の入り口近くの道沿いには「聖護院御用拝所（しょうごいんごようはいしょ） 佛念山不動明王（ぶつそうざんふどうみょうおう） 是（これ）より二丁」と彫られた石の道標が建てられています【表紙写真】。行者はこの道標をたよりに行場を目指したのでしょう。この蕎原とちのき谷について、古い文献の記述と、本市の現地調査で判明したことを以下に紹介します。

①『葛嶺雑記（かつれいざっき）』の記述

まず古い文献ですが、江戸時代末期にあたる嘉永2（1849）年に、智航上人（ちこう



写真1 日本遺産認定証

しょうにん) という行者が、葛城二十八宿(役行者が法華経を埋納(まいのう)した28の塚のこと)の实地調査を行い、『葛嶺雑記』という書物をあらわしました。この中に「蕎原とちの木谷」について右のような記述があります【写真2】。

＜解釈＞五本松の峯から、北方にある蕎原とちのき谷に向かって拝んだ。とちのき谷には金剛童子、役行者が爪で彫ったという地藏、護摩行をおこなう場所に不動明王(不動の滝のこと)、役行者が護摩修法をなされた跡がある。

五本松の峯は和泉山脈にある峯のひとつで、本市と泉佐野市の市境にあたります。蕎原とちのき谷は役行者ゆかりの行場ですが、現地に行くには、葛城二十八宿をまわるルートからはずれ、山を下りる必要があるため、智航上人は見晴らしのよい五本松の峯からとちのき谷を拝むにとどめたのでしょう。

②現地調査

『葛嶺雑記』の記述を確認するため、本年2月に土地所有者の許可を得て現地調査を実施しました。谷の水量は深い所でも足首までしかありませんでしたが、巨石が転がる険しい場所【写真3】を登っていくと、やがて岩壁がそそり立つ落差10mもの滝が現れました。これが『葛嶺雑記』に「不動」と記され、滝そのものが不動明王としてあつく信仰された「不動の滝」です【写真4】。また谷から尾根に登り、滝の上に回り込むと、小さな祠(ほこら)の跡と考えられる基壇が残っていました。断言はできませんが、『葛嶺雑記』に記す金剛童子をまつた祠の跡ではないかと考えています。



写真4 下から見上げた「不動の滝」

【今後の調査について】

追加認定は実現しましたが、蕎原とちのき谷については現地を一通り確認したにすぎません。今後も継続的に調査を進め、新たな発見があれば本紙でご報告します。

なお10月26日(土)には泉南市、熊取町とともに、日本遺産追加認定の合同報告会を本市役所6階福祉センター多目的ホールで開催いたします。詳細は本市ホームページをご覧ください。

◎蕎原とちのき谷は私有地につき立ち入りはできません。石の道標は道沿いにありますのでご覧いただけます。

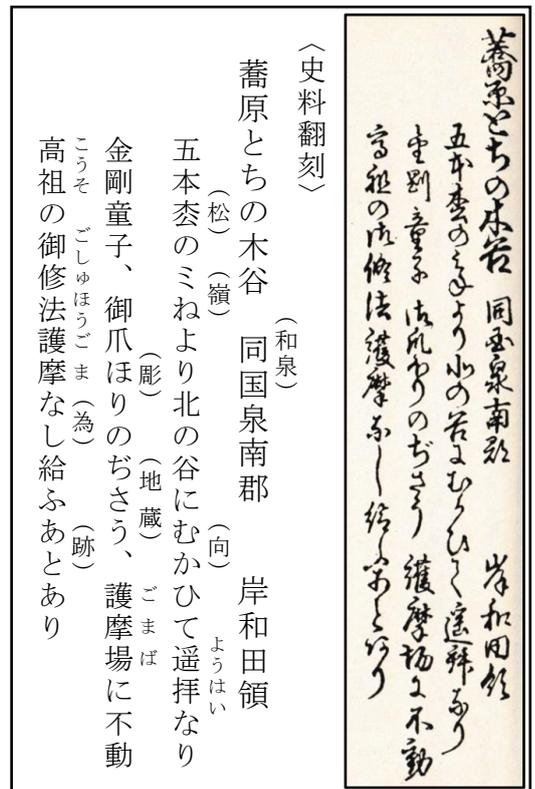


写真2 『葛嶺雑記』(抜粋)
右側に「蕎原とちの木谷」の記述、左側にその史料翻刻を付けています。

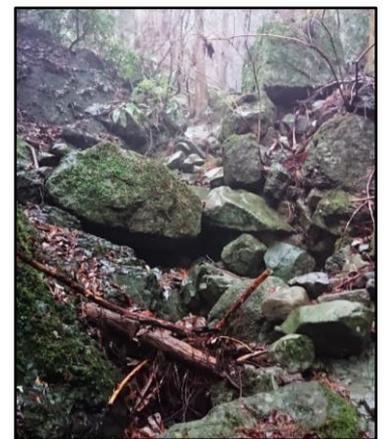


写真3
巨石が転がる谷の様子



岩橋善兵衛 (いわはしぜんべえ) と大坂の天文学者たち

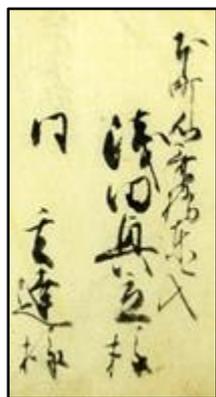
貝塚市の生んだ江戸時代の科学者、岩橋善兵衛 (1756～1811年) は、当時日本一性能の良い望遠鏡を製作しました。正確な日本地図を作製した伊能忠敬 (1745～1818年) も、全国測量に際し観星鏡 (かんせいきょう) (国宝「伊能忠敬関係資料」) という善兵衛の望遠鏡を使用していました。そして、望遠鏡を介してこの2人をつなぐ役割を果たしたのが大坂の天文学者たちでした。本号では、2人をつないだ大坂の天文学者たちを紹介します。



大坂の天文学者 麻田剛立 (あさだごうりゅう)

江戸時代は、鎖国政策で外国書籍の輸入が厳しく制限されていたため、海外の進んだ科学技術が入ってこない時代でした。しかし、8代将軍徳川吉宗が外国書籍の輸入を緩和したため、18世紀後半になると西洋の天文書を漢訳した天文書が中国清 (しん) から、輸入され民間の天文学者たちの手にも入るようになりました。

こうした天文書をもとに西洋天文学を独学で学んだ天文学者の一人が、大坂の本町四丁目 (現在の大阪府中央区本町三丁目付近) に住んでいた麻田剛立 (1734～1799年) でした。剛立は、もと豊後国杵築藩 (ぶんごのくにきつきはん) (現在の大分県杵築市) の藩医でしたが、天文学を志す気持ちが強く、38歳のころ脱藩して大坂へ出ました。脱藩に際して「麻田剛立」と改名し、大坂では医者として生計を立てながら天文塾「先事館」(せんじかん) を開いて天文学研究に没頭しました。先事館で行われた研究は非常に近代的でオープンなもので、中国天文書から最先端の西洋天文学を弟子たちとともに学び、西洋天文学の理論を天体観測で確認した上で、独自の研究理論を考案するというものでした。こうした西洋



天文学を基礎とした剛立の活動は、不具合の多かった暦 (こよみ) 「宝暦暦」 (ほうりゃくれき) の改定を計画していた幕府の目にとまりました。幕府は剛立を天文方 (てんもんかた) に登用しようとしたのですが、剛立は脱藩したことや高齢であることを理由に辞退し、弟子である高橋至時 (たかはしよしとき) (1764～1804年) と間重富 (はざましげとみ) (1756～1816年) の2人を推薦したのです。

岩橋家文書「仕入方直段扣帳」には、得意先として「本町心斎橋東へ入／浅田興立 (麻田剛立) 様／同 玄達 (立達／りゅうたつ、剛立の養子) 様」とあります。



高橋至時と間重富

高橋至時は大坂京橋口御定番同心 (ごじょうばんどうしん) をつとめた下級武士で、間重富は質屋を営んだ町人でした。2人は天明7 (1787) 年ごろに麻田剛立に入門したとされ、至時は天文学の理論面の才能を、重富は観測機器の改良や発明など技術面の才能を持っており、剛立の弟子の中でも特に秀でた実力を備えていたといわれています。



高橋至時 (左) と間重富 (右)

2人が江戸への出府を命じられたのは寛政7 (1795) 年3月のことでした。暦の改定を行う改暦事業を下級武士や町人に担当させることは異例のこ

とでしたが、武士であった至時は幕府天文方に昇進し、町人の重富は暦学御用（れきがくごよう）として天文方を補佐しました。この改暦事業にあたっては、重富が調達した岩橋善兵衛の望遠鏡が幕府の天文台「司天台（してんだい）」に設置され、日々の天体観測に活躍しました。そして、2年後の寛政9（1797）年には最新の西洋天文学の成果を採用した新しい暦が完成し、翌10年から「寛政暦」（かんせいれき）として施行されました。

改暦を無事に終えた至時は、天文方として江戸に残り研究を続けながら、弟子の伊能忠敬の全国測量をサポートしていくことになります。一方、重富は大坂へ戻り、家業を続けながら幕府の御用観測と研究を行い、天文方をサポートしました。



高橋至時・間重富と岩橋善兵衛の望遠鏡

岩橋善兵衛は高橋至時と間重富が改暦事業を命じられた2年前の寛政5（1793）年、京都と大坂で天体観測会を行っています。これ以後善兵衛の望遠鏡の性能が大坂の天文学者たちに広く知られるようになったものと思われています。

至時の次男渋川景祐（しぶかわかげすけ）が編さんした『星学書簡』には至時と重富の往復書簡が掲載されていますが、その中に望遠鏡の調達先として善兵衛の名前が複数確認できることから、至時と重富は早くから善兵衛の存在を知っていたことが推測できます。

善兵衛の望遠鏡の販売ルートとして、善兵衛 - 重富 - 至時ルートは有力な販売ルートの一つでした。至時はさまざまな依頼を受けて善兵衛への注文を大坂にいた重富に送り、注文を受けて製作された望遠鏡は重富を介して江戸の至時の元へ送られ、至時から幕閣の人びとや伊能忠敬の手に渡ったのでした。



例えば、寛政10（1798）年12月13日に至時が重富に宛てた書状には、「堀田殿、また申され候（そうろう）、この間の小遠鏡くらいか、今少し長き方にて右の小遠鏡より今少しよく見え候遠鏡あつらえ申したく候よし、金式（に）両くらいにて出来申すべきか、承合（しょうごう）くれ候よう申され候、善兵衛へお便りの節（せつ）、お問合せくださるべく候、頼み上げたてまつり候」とあり、堀田正敦（ほったまさあつ／幕府の若年寄）殿が、小型で性能の良い望遠鏡を注文したく、金2両くらいで出来るか調べて欲しいと言っているのが、善兵衛へ便りを出す際に問い合わせさせて欲しい、と記しています。

国立天文台所蔵『星学書簡』上巻（国文学研究資料館国書データベース掲載画像）より。3行目下部（囲み部分）に「善兵衛へ御便之節、御問合可被下候」とあります。

このように、当時の大坂には優秀な天文学者たちが集まり、岩橋善兵衛の望遠鏡は麻田剛立門下の高橋至時と間重富によって幕府の知るところとなり、改暦事業という国家事業を支えました。そして時を同じくして、至時の弟子となった伊能忠敬が全国測量を行うこととなり、ここでも善兵衛の望遠鏡は無くてはならないものとなりました。今回紹介した大坂の天文学者たち、そして何より善兵衛が製作した望遠鏡が、歴史上直接会うことがなかった善兵衛と忠敬の2人を結びつけたのでした。



伊能忠敬

新緑のブナ林自然観察会を実施しました

令和6年5月26日（日）に和泉葛城山で「新緑のブナ林自然観察会」を実施しました。今年は例年行っているハイキングではなく、バスで葛城山山頂まで向かい、現地で3班に分かれて、各班の解説員である環境省自然公園指導員の中村進氏、本市文化財保護審議会の田中正視委員、和泉葛城山ブナ愛樹クラブの土井雄一代表の解説を聞きながらブナ林を散策しました。募集枠の30名いっぱいの応募をいただき、25名が参加しました。



林の中を進む一行



展望台で解説員から
レクチャーを受ける参加者

当日は晴天に恵まれ、さわやかに緑が萌える中、散策を行いました。解説員の説明を聞くだけでなく、参加者からも自然や植物の名前についての質問が飛び出すなど、和気あいあいとした雰囲気の中で観察会は進みました。

参加された方のアンケートでは、「ブナ林や植物のくわしい解説が聞いて勉強になりました」、「美しい自然の中で過ごせて有意義な一日でした」などの感想をいただきました。

参加者の皆様に和泉葛城山ブナ林の魅力を知っていただく一日になったものと思います。

貝塚市文化財保存活用地域計画策定事業

パブリックコメントと市民説明会を実施しました

本紙83号でお知らせしたように、貝塚市文化財保存活用地域計画（以下、「地域計画」とします）の素案について、市民の皆様からご意見を募集するためパブリックコメントを実施しました。期間は7月8日（月）から7月31日（水）までの24日間です。またできるだけ多くのパブリックコメントをいただくため、7月20日（土）午後2時から3時半まで、市民福祉センター6階多目的ホールにて、地域計画素案についての市民説明会を開催しました。市民説明会当日は参加いただけるか心配するほどの猛暑日でしたが、幸いにも25名もの参加をいただき、素案の内容について活発な質疑をいただきました。



会場にお越しの参加者のみなさん

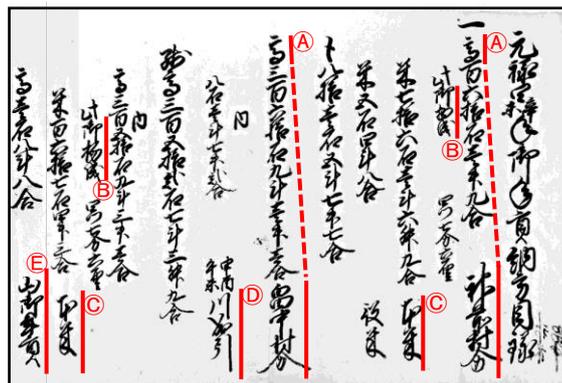
またパブリックコメントでは、計画策定の目的に関する記述を充実すべきとのご意見、貝塚寺内町における今後の保存と活用の取組みに対するご意見、戦争遺産に関するご意見などの他、本市の歴史に関する伝承についてご教示いただき、地域計画策定に対する賛意などをお寄せいただきました。市民説明会、パブリックコメントに参加いただいた皆様、ありがとうございました。ご意見を反映させた計画修正案は8月22日に開催した本市地域計画策定協議会にて承認を受け、9月26日に文化庁に提出いたしました。本紙83号に記したように、今後文化庁の指導・助言を受けて11月に計画を完成させ、12月に計画の認定を受ける予定です。

◆岸和田藩の年貢のしくみ

令和6年6月5日・12日・19日・26日、7月10日の水曜日と、6月7日・14日・21日・28日、7月5日の金曜日の2グループに分けて、「岸和田藩の年貢のしくみ」と題し、古文書講座を開催しました。

これまでの講座アンケートでリクエストの多いテーマの一つで、地元岸和田藩の年貢のしくみが幕府や他の領主と異なる部分が多いと伝わることから、実際に古文書を読み解いて、どのように違うのか教えてほしいとの声があり、今回テーマに取り上げました。

まず、元禄4（1691）年に岸和田藩の代官から神前（こうざき）村・畠中（はたけなか）村の村役人たちに宛てられた御年貢納方（おさめかた）目録を見ていきました。村から代官に提出する年貢勘定目録と対（つい）になるもので、納めた年貢の内訳が記されており、年貢を確かに受け取ったとして、代官から村役人に渡したものです。この目録には、まず①「高…〇〇村分」（〇〇村の石高）、②「御物成」（田畑などに掛かる年貢率）、③ $\text{①} \times \text{②} = \text{③}$ 「本米」（本年貢）、④「川成引（かわなりびき）」（水害などで田畑が水没したため、数年間年貢を掛からなくなった土地）や、⑤「山御年貢（やまおねんぐ）」（山の用益権を持つ村に掛かる税）などが記されています【右写真】。また、新たに開墾した新田畑についてもその石高と年貢の記載が見られますが、他の土地と比べて年貢率が低く設定されています。文末には、藩の米蔵に年貢米が納められたことを代官が確認したとあります。



元禄四辛未年御年貢納方目録（前半部）

次に、寛永13（1636）年に岸和田藩に提出した年貢計算の控えを見ていきました。5年前に藩は石高を5万石から6万石へと引き上げました。領地は全く増えていませんが、実際の収穫高が高かったことから、それに合わせて石高が増やされました。しかし、それでも年貢率は高く、年貢率は一般には4割から5割程度であるのに、岸和田藩では9割を超える高い率が課せられた村が多数ありました（神前村・畠中村は4割7分台と高くはなかった）。そのことから「岸和田藩は8万石の規模を誇る」と、肥前平戸（現在の長崎県平戸市周辺）藩主松浦静山（まつらせいざん）が文政4（1821）年以後にあらわした『甲子夜話』（かっしやわ）で紹介されたほどです。

最後に、延宝4（1676）年に貝塚ト半寺内（ぼくはんじない）に暮らす岸和田藩領の土地を所持する地主が、年貢を納めないという事件が発生し、この対応に関する古文書を取り上げました。この際、寺内の領主ト半氏（5代了句・りょうこう）は岸和田藩に謝罪し、地主たちは二度と年貢未納をおこさないことを約束していることが明らかになりました。

これらを受けて、受講者の方から「岸和田藩の江戸時代における年貢のしくみについて、貝塚の神前・畠中両村が納めていた年貢の状況が具体的に記録されている史料で学ぶことができたのは大変勉強になりました」との感想が寄せられました。

文化財講座・セミナー・展示

令和6年

◆10月

- 16日・23日・30日の水曜 午後1時15分～3時45分
古文書講座74 **1班** ※第3回以降
「岸和田藩の年貢のしくみ2」図書館2階視聴覚室
- 18日・25日の金曜 午後1時15分～3時45分
古文書講座74 **2班** ※第3回以降
「岸和田藩の年貢のしくみ2」図書館2階視聴覚室
- 26日(土) 午後2時～4時
日本遺産「葛城修験」追加認定合同説明会
市役所6階福祉センター多目的ホール

◆11月

- 1日(金) 午後1時15分～3時45分
古文書講座74 **2班**
「岸和田藩の年貢のしくみ2」図書館2階視聴覚室
- 23日(土) 第131回かいつか歴史文化セミナー
講演会「水間寺の歴史について」
水間門前町「桜のテラス」(水間寺駐車場横)

◆12月

- 22日(日) 第132回かいつか歴史文化セミナー
見学会「水間寺の境内と建造物について」
水間寺境内ほか

郷土資料展示室

「貝塚の民話」
絵本原画展 2024

10月20日(日)まで

11月1日(金)から

企画展「文献に見る
岩橋善兵衛と
伊能忠敬」

12月8日(日)まで
12月21日(土)から

「貝塚市の
指定文化財」展
(第3期)

令和7年
2月5日(水)まで



善兵衛が観た未来プロジェクト
～家族で楽しむ測量・地図・宇宙～

市内3か所で伊能大図を展示します！

伊能忠敬の全国測量の成果として作成された日本地図「伊能大図」のうち、「大図」(1/36,000、全214枚)の富士山周辺部分の実物大パネル(千葉県香取市所蔵)を展示します。ぜひこの機会に日本最初の本格的な地図をご体感ください。

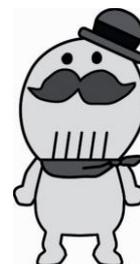
- ①貝塚市立善兵衛ランド 企画展「善兵衛と伊能忠敬」
11月1日(金)～24日(日)
- ②コスモスシアター中ホール(ホワイエ) 文化の日のつどい
11月3日(日)
- ③貝塚市郷土資料展示室 企画展「文献に見る岩橋善兵衛と伊能忠敬」
11月1日(金)～24日(日)



かいつか文化財だよりテンプス84号



令和6年10月15日発行
貝塚市教育委員会
〒597-8585 貝塚市畠中1丁目17-1
Tel(072)433-7126 Fax(072)433-7053
Email:bunkazai@city.kaizuka.lg.jp
※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。
年3回発行:各1,000部



貝塚市イメージ
キャラクター
つげさん
貝塚市特産品「つげ
櫛」をモチーフとした
デザイン。